

トゥランガリラ交響曲とは

作曲者:オリヴィエ・メシアン(1908-1992)

フランスの作曲家で、鳥の声・色彩感覚・宗教的神秘性を独自に融合した 20 世紀音楽。巨匠。本作は 1946～48 年に作曲され、1949 年にバーンスタイン指揮で初演されました。

1. 楽曲の特徴

巨大編成のオーケストラ。木管・金管・弦に加え、独奏ピアノ、オンド・マルトノ(電子楽器)、チェレスタ、ヴィブラフォン、グロッケン、マラカスなど多彩な打楽器 が加わる“超大編成”。ガムランのような煌めきと、オンド・マルトノの人間的な歌声が特徴です。

2. 10 楽章・約 118 分の大作

愛の歌、宇宙的な歓喜、静かな夢想が交互に現れ、「愛のテーマ」が全曲を循環して結びつける構造を持ちます。

“愛と死”をめぐる物語性

メシアンはこの曲を「トリスタン三部作」の中心に置き、「トリスタンとイゾルデ」などの愛と死の文学から着想を得ています。

官能的で色彩豊かな響き

メシアン特有の、限定移調の旋法、非対称リズム(インドのターラ)、鳥の声の模倣が随所に現れ、宗教的でありながら官能的な音響世界を作り出します。

3. 10 楽章の内容(要点)

第 1 楽章:序章 Introduction

主要テーマを提示する導入。幻想的な響き。

聴きどころ:ピアノの鋭いリズム、オンド・マルトノの柔らかい光のような音色、金管の明るいファファーレ。

第 2 楽章:愛の歌 I Song of Love (7:05)

情熱的で官能的な愛の音楽。

聴きどころ:弦の甘美な旋律、オンド・マルトノの官能的な歌声、ピアノが時折きらめくように絡む。

第 3 楽章:トゥランガリラ I Torangalila 1 (15:10)

複雑なリズムを若い奏者が勢いよく叩き出すため、非常にエネルギッシュ。打楽器群が生き生きして、ガムランのような輝きが強い。

第 4 楽章:愛の歌 II Song of Love2 (21:05)

オンド・マルトノがよく歌い、ペトレンコのテンポ設定が自然で流麗。“若い恋の情熱”のような明るい色彩がある。

第 5 楽章:星々の血の喜び Joy of the blood of the Stars (32:05)

全曲最大のクライマックス。宇宙的な歓喜の爆発。聴きどころ:打楽器の怒涛のリズム、金管の咆哮、ピアノの超絶技巧、オンド・マルトノが宇宙的な光を放つ。

第 6 楽章:愛の眠りの園 Garden of the sleep of love (39:00)

最も静かで甘美。鳥の声が夢のように響く。

第 7 楽章:トゥランガリラ 2 Torangalila 2 (50:30)

第 8 楽章:愛の育み Development of love (54:50)

第 9 楽章:トゥランガリラ 3 Torangalila 3 (1:05:50)

リズムと色彩の探求。

第 10 楽章:終曲 Final (1:11:00)

愛のテーマが勝利のように回帰し、輝かしい終結へ。